

特別付録
M∞Card
エムカード

スペシャルDLC

ギブソン2019年
モデル最速試奏!!

YOUNG GUITAR

10
October
2018

ギブソンの底力!!!
57つの側面から斬るその魅力

第2特集「米老舗ギターブランドを徹底分析!!」

待望のニュー・ソロ・アルバム「LIVING THE DREAM」完成!
本誌独占コンテンツを含む50ページ超の濃密大特集でその全容に迫る…!!

SlasH



THE SCORE

- GUNS N' ROSES 「Double Talkin' Jive」
- GARY MOORE 「Still Got The Blues」
- MICHIYA HARUHATA 「J'S THEME (Jのテーマ) 25th ver.」

James Tyler Guitars

from San Fernando, CA / established in 1972

一流プロの演奏を支え続けるコンポーネント・ギター・ブランドの代表格、ジェームス・タイラー。一目見て強烈に脳裏に焼き付くこのモデルにも、その徹底したビルダー魂が宿されている。



Featured Model

Burning Water

25th Anniversary Limited Edition

[SPECIFICATIONS]

- ボディ：スワンプ・アッシュ
 - ネック：クォーターソウン・メイプル
 - フィンガーボード：パーフェロー
 - ジョイント：ボルト・オン
 - フレット数：22
 - スケール：625mm
 - ブリッジ：ゴトー “G2TS”
 - ピックアップ：ジェームス・タイラー “JTS Stingray 500” (フロント&センター)、“Angry Retro” (リア)
 - コントロール：マスター・ヴォリューム、トーン×2、5ウェイ・ピックアップ・セレクター
- [価格：オープン・プライス]

INTERVIEW

作るのは“自分が欲しいと思えるギター”

マイケル・ランドウを始めとするトップ・クラスのスタジオ・ミュージシャンにも愛用者が多いことで知られるジェームス・タイラー。アメリカ西海岸のロサンゼルス北部、サンフェルナンド・バレーから一級品のギターを送り出している、コンポーネント・ギター・メーカーの筆頭格に位置するブランドだ。音楽シーンの最前線とも言える地域で一流プレイヤーの要望に応えるべく奮闘を続けるタイラー氏。そのクラフトマンとしての魂を語っていただく。

——ギター・ビルダーを志した時期ときっかけについて。

ジェームス・タイラー (以下JT)：実は私がギター・ビルダーになろうと考えたことは一度もなかったんです。’70年代に私はギターのリペアマンとして働き、ロサンゼルス“Norman’s Rare Guitars”というショップで、何年もリペアやレストアを行っていました。おかげでギタリストから信頼が得られ、この地の音楽シーンが大きくなっていく時代に、その界限

でよく名前を知られるようになりました。スタジオ・ミュージシャン連中とはたくさん仕事をしましたし、LAを拠点に活動していた大物ロック・グループも色々いましたね。ちょうど同じ頃、シェクターやクビッキといった会社もリプレイメント用のネックやボディを作り始めていて、間もなく私たちのところにもカスタム・メイドの楽器を求める声が寄せられるようになりました。そこで私はネックやボディを購入し、ピックアップはセイモア・ダンカンから調達し、ハードウェアは様々な会社に注文して、お客さんのために組み立てを行ないました。私のギター製作はリペア・ビジネスから生まれたのです。そこから1つ、また1つと大きくなっていきました。

——ジェームス・タイラーというブランドを設立した時期とその経緯について。

JT：最初はフェンダーのコピーのようなギターを作っていたのですが、ステージやTV番組に出てくるのは“フェンダー”と刻印されたギターを持ったギタリストばかりでした。そこで私は自分の名前が入ったギ



James Tyler

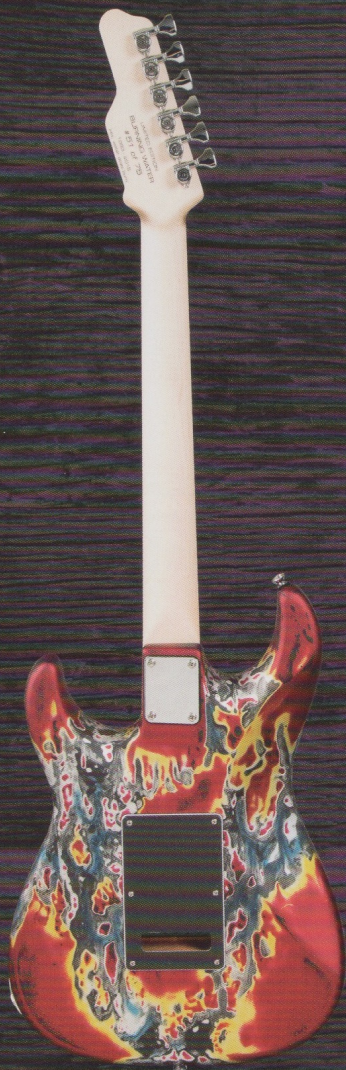
ターを作ってやろうと考え、ヘッドの形状やピックアップ、ボディのシェイプもオリジナルに変更しました。最初のモデルである“Studio Elite”は’87年の“LA Guitar Show”でお披露目となりました。さらにミュージシャンたちとの交流があったおかげで、私の名前は雑誌などに載るようになったんですよ。国内のあらゆる場所から、電話をかけてきたり、直接私を訪ねてきたりといった形で、プロのミュージシャンと同じギターに自分にも作ってほしい、という話をもらうようになったのです。もっと有名になると、今度はカスタム・ギターが欲しいという声が上がりました。——ジェームス・タイラーがギター作りにおいて

TEST REPORT

隙のない万能なプレイビリティ

元々マイケル・ランドウのために作られ、その強烈なフィニッシュによってジェームス・タイラーを象徴する1本となった“Studio Elite Burning Water”。今回試奏したのは同モデルの25周年を記念した世界75本限定ヴァージョンだ。同社のギターではお馴染みの大きめなヘッドを持つこのモデル、ギター全体の重量バランスが絶妙で、重過ぎることも軽過ぎることもなく、安心感さえ得られるほどの抱え心地だ。薄めのネックや指板のグリップ感も快適で、細部に渡るまで丁寧に仕上げられているためフィンガリングのスムーズさは筆舌に尽くしがたい。

フロントとセンターのシングルコイル・ピックアップは明るい高域にピークを持った王道のトーンながらも、あくまで太い。一方リアのハムバッカーは適度にパンチのある歪み具合で、強固な音の芯と太さがありつつ、シングルコイルからスムーズにつながる明るめのトーンだ。これらのピックアップを活かしたギター全体のトーンは、弦振動の暴れと音色の膨らみを持たせながらも、現代的な厚みと太さもあり、単なるヴィンテージ系の再現とは次元の異なる強力なサステインも実現させる技術は流石。もちろんセッティングや組み合わせる機材次第でヴィンテージ系の音色もしっかり作れるし、レンジも適度に広く、高域の抜けの良さや引き締まった重低音も兼ね備えているため、ジャズ/フュージョンに合うクセのない音や、ヘヴィ・ミュージックに対応する豪快なサウンドにもそのまま使える。まさに万能で隙はなし。奇をてらわず、特別な機能に頼らないという昔ながらのオーソドックスな手法でも、すべての面でプレイヤーを満足させるギターが作れることを証明している。そして何と言っても、ただ派手なだけでなく深みや渋さも感じさせる芸術的なボディのペイントは、ギタリストとしての個性や存在感を思い切りプッシュしてくれるだろう。



▲ピックアップはすべてジェームス・タイラーの自社製モデル。5ウェイのピックアップ・セレクターと組み合わせると多彩なサウンドを創出することができる。



▲ブリッジ部分には2点支持のトレモロ・ユニットを搭載。その稼働域は実に広く、動作が実に滑らかで、表現力豊かなアーミングを可能としてくれる。



▲ボルト・オンのネック・ジョイント部は角度を付けた形でカットされており、その周囲も滑らかにえぐられている。ハイ・ポジションの弾きやすさも考慮した構造だ。

リシーとしていることは？

J T：私が自分で欲しい、弾きたいと思うようなギターを作ることです。万人受けするようなギターは作りませんし、最先端の流行やギミックに飛びつくこともありません。私が魅力的だと思うものでなくてはダメなんです。そこから、できるだけ完璧なギターを作る努力をしていきます。

——ジェームス・タイラーがターゲットにしているギタリストのタイプとは？

J T：私が対象としているのは優れたギターを求めてやまないプレイヤーです。不満に感じることを渋々受け入れるのではなく、良いプレイをするために犠牲を惜しまない、そしてその目標を達成するために最高の道具を持ちたい、そう考えている人たちのことです。

——ジェームス・タイラーのギターに使われる木材の選定に当たってこだわっているポイントとは？

J T：ほとんどの人がトラディショナルなサウンドのギターを欲しがっているので、トラディショナルな材を使っています。木材は自分が見つけられる中で最高品質のものを手に入れています。

——ピックアップのセレクトについて。

J T：ピックアップは種類の異なるものをたくさん作っており、それぞれ固有のサウンドを持っています。

(問)キタハラ楽器 [https://www.kitaharagakki.com]

また品質維持のため、多くのパーツを社内で製造しています。配線材といった社内では作れないパーツもありますが、これは私の希望に沿って作られた特注品を使っています。例えばピックアップのリード線やギター内部に使われている線材は、通常市場で手に入る製品をそのまま使っている会社がほとんどですが、私の特注する配線材は、音を耳にすれば違いが分かるでしょう。もっとクリアな音になりますから。

——ハードウェア類のセレクトについて。

J T：ペグやブリッジといった重要なパーツには独特のスペックを求めていますし、そのスペックを反映させたハードウェアを作ってくれる会社と共に仕事をしています。例えばゴトーのトレモロ・ユニットがその1つ。ゴトーは私の指定した通りの部品を用いて、特注のブリッジを作ってくれました。ただ単に在庫があったものを出してきたわけではないんです。

——フィニッシュについて。

J T：私は他と違った、アーティスティックでユニークで、なおかつ人々から親しまれるようなもの考えるのが好きです。ギターのフィニッシュに関してクリエイティブになり、1つ1つのギターを芸術的なものに仕上げるのは楽しいですね。

——ネックの形状について。

J T：大抵の人に気に入られるヴィンテージのネック・シェイプがあったんです。本当に古いギターのネックは、指板の端が摩耗していますが…そこにはある種の弾きやすさがあり、私はそれを新しいギターのネックにコピーしようと努めました。まるで昔からの友達だったかのような感触が得られるようになります。“Norman's〜”でリペアやレストアを始めた頃から、私は常にヴィンテージ・ギターならではの特性を参考にしながら、あらゆる作業に取り組んできました。そういった観点を現代的なギター作りに持ち込むこと、ヴィンテージなヴァイブの中にモダンな機能を加えることなどを念頭に置いているんです。

——今回試奏した“Burning Water 25th Anniversary Limited Edition”の注目してもらいたいポイント。

J T：25年前に作ったものに対して忠実に、できる限り同じものを作ろうと考えたことに尽きます。私が作ったピックアップが搭載されているのは、オリジナルとは異なる点ですけどね。

——今後製作を予定している新しいモデルや、温めているアイデアについて。

J T：アイデアは常にたくさん抱えていますが、今はまだお話できませんね。